

処理を考える (32)



10月

## 図・表・写真などの処理 その6

図とか表は、本によって様々な使われ方をしています。例えば写真集のように写真がその本の主体をなして、それにちょっとした説明がついているような本もあります。又、文章の中にちょこちょこ図や表があって、その図や表を説明しないと本文が理解出来ない、そんな本もあります。図や表・写真などがたくさんあるけれど、本文に説明があって、図や表・写真の説明をしても、本文と同じことになってしまうような本もあります。このように、原本の中で図や表などがどのように使われているかを分類したのが、「図・表・写真などの原本に占める役割」です。

今、現実に各地の図書館やグループで図や表のある本がどのように作られているのか、私はほとんど井の中の蛙で知らないのですが、前に何かの会合で、うちのグループではどんな図でもどんな表でも本に書いてあることは全部説明します、それが利用者の要望なんです、ということをおうかがったことがあります。これが間違っていると申し上げるつもりはありませんが、その「全部」ということを、ちょっと考えてみたいのです。

表の場合は大体字で書かれていますから、それをすべて読めばこれで全部ということになるのかもしれませんが、図の説明の場合には、Aさんの全部とBさんの全部は必ずしも一致しないわけです。私はこれで全部だと思っても、違う人が見れば、「こちらの方が重要なよ」ということもあって、図の場合は「全部」というのは、非常に難しいと思います。情文では、「図の説明は省略します」というようなコメントを

入れて、図に一切触れないで出来上がっている本もありますし、説明する図があったり説明しない図があったりする場合には、その都度説明する時はする、しない時は「図の説明は省略します」というコメントを入れる、というような作り方をすることもあります。著作権上の問題もありますから、あんまり勝手にどんどん省いていってしまうと、著者の側から考えたら、完全に録音してくれてはいないじゃないかと云われても仕方がないような所もあります。（間違っただ説明をしてしまったら、問題はもっと深刻だと思えますが）。

このようなむずかしい問題を念頭においていて、では実際にどのように録音するのかということを考えていきたいと思えます。

### 原本には最後まで目を通す

音声訳しましょうということで本を手にとられましたら、必ず一度、通読されると思います。その本に図や表や写真など、自分が説明を加えないといけなようなものがある時には、そのことを念頭に置いて最後まで読んでいただきたいわけです。その上で、例えばこの本の図は全部省略してもいいと思えたら、図や表のある前後の本文を声を出して読んでみてください。出来ればその部分を録音して聴いてみて、省略して読んでいっても著者の書いていること全部が正しく伝わるかどうか、確認していただきたいのです。又、図や表を説明しないと、本に書かれていることがキチンと伝わらないということになりましたら、説明の文章を作って、それを本文に挿入して、前後少なくとも1ページ位の文章を読んで録音して、聴いてみて下さい。

### 説明文を考える

ここで一寸、余分なことを申し上げますと、この作業は音声訳者の作文能力に大きく関わってきます。短い言葉で的確に説明出来れば、聞いている方も余計な事を考えなくて、ずっとその事柄に頭がついて行くわけですが、何が主語か何が述語かわからないような文章では、せっかくの説明も混乱を招くだけです。失礼なと思われるかもしれませんが、私たちの日常には、主語のない会話はいくらでもあります。日常、論理的な文章など必要ない生活を続けていますと、作文はなかなかむずかしいものです。誰が聞いても事柄が一つに特定されて理解出来る、簡潔な文章を心がけて下さい。主語・述語がわからないというのは極端な例ですが、何を云わんとしているのかははっきりわかる、必要なことが全部もれなく短い文章の中に盛り込まれている、そんな説明はある程度意識して訓練しないとむずかしいことだと思えます。説明の文章を上手に作るということは、文章を上手に読むのと同じ位、この仕事では大きなウエイトを占めていると思えます。

つづく

## 先月の例文の処理例

### ソーセージ

牛肉の赤ワイン煮はほっくりとやわらかいし、ゼリー寄せは透明で目にも美しく、アプリコット・タルトからはさわやかな甘酸っぱさが香り立つ。気分によっては、エスカルゴを十二個と、酢づけのキャベツとソーセージ(1)、それにいわゆる遅摘みの、金色がかったアルガス・ワイン「ゲヴェルツトラミネール」を奮発してもいい。

.....

四季のリズムと旬も、尊重したい。今なら口をさっぱりさせるには、メロンと赤い実の類に限る。いちご、カシス、フランボワーズ。牡蠣と猟肉なら(2)、秋まで待たねばならない。

### 処理のポイント

下線の部分(1)(2)のルビの処理が問題です。先にルビを読むか後でルビを読むかの問題です。また、ルビを読んだ後に語句を読む場合、聞き手にルビの語句を読んでいることがわかるようなテクニックも要求されます。並列に聞こえて混乱するような場合は注意が必要です。

(1)の下線部分の読み方は、①「・・・酢づけのキャベツ、シュークルルトとソーセージ、それに・・・」と読む人と、②「シュークルルト、酢づけのキャベツ、とソーセージ、それに・・・」とに分かれるようです。この例文にはたまたま日本語に外国語のルビがあるものと外国語に日本語のルビがあるものとが同時に出てきています。

ルビの処理を考える場合、著者がそう読んで欲しいからルビを付けている場合(多くはこちらです。)と、そうではなくルビを本文の補足的な意味で付けている場合があります。ルビを優先して読む時は、読み方として付いている場合です。ルビが補足的に付けられている場合はルビを後に読みます。その方が聞き手に意味が通じやすくなります。

この例文の場合、(1)のルビは補足的なルビで、(2)のルビは、「猟肉」という日本語がありませんので補足的なルビではなさそうです。つまり「ジビエ」ということばに対して、「猟肉」は著者が補足的に付けた日本語ともとれます。

従って、ルビの処理としては(1)の時は、補足的なルビですので、ルビを後で補足的に読みますが、(2)のルビはルビを先に読みます。「猟肉」の読み方ですが、「ジビエ」もあまりききなれていませんし、「りょうにく」という日本語のことばもありませんので、「ジビエ」＝「猟肉」とはなかなか結びつきません。「りょうにく」と読む場合、字の説明も欲しいところです。→「ジビエ、カッコ、リョウニク、狩猟の猟に肉、トジ、牡蠣とジビエなら・・・」

## 今月の練習問題

### 練習問題1

\*表記が問題

#### 1 笑芸の端境期——春団治と松鶴

「話」と「咄」と「噺」

漢字には無限の英知がこめられている。「はなし」もそうで、話、咄、噺を区別している。どう区別するのかを説明すれば、「話」は私たちの会話一般、「咄」は「口にして出す」だから、出すという形式、「噺」は「口にして新しい」から、内容である。

一口咄、落し咄、人情咄、怪談咄などのように形式を問う場合は「咄」を用い、滑稽噺、新作噺などは、形式より内容に重きを置く際に用いる、と理解すれば、使い分けは容易となろう。「昔噺」と書かれたりするが、形式であるから本当は「昔咄」のほうが正しいと筆者には思える。

芸能の歴史は、どのジャンルにあっても咄と噺、すなわち形式を生み出し、内容を革新する連綿たる努力の継続であった。能、狂言、文楽、歌舞伎、舞踊、落語、講談、浪曲、奇術、常磐津、清元、新内、長唄、演劇、オペラ、ミュージカル、バレエ、その他、これら諸芸能（芸術）の形式は判然と区別され、境界を持つ。その形式内でつねに「噺」的内容の新しさに挑戦してきたのである。

時代が変わる。それにつれて新業種の産業が生まれ、経済を活性化させる。二十一世紀を展望して、新たなリーディング産業は、ロボット、エレクトロニクス、遺伝子工学などの産業分野であろうとされる。経済の領域は新形式を創造しやすい。が、芸能にあっては、従来には見られない形式の創造はきわめてむずかしい。

実は、漫才の誕生以降、この国の芸能は、形式として新しい芸能を何一つ生み出していない、という長い不作の季節下にいまもあるのだ。たとえばディスク・ジョッキーを新しい芸能ジャンルとして独立させ得ないか、と考える。しかし、DJは先行する諸話芸の複合プラス音楽であり、寄せ集めのおしゃべりだから、形式としての芸能ではない。

考えられるあらゆる形の芸能を人間はもう創り尽くしたのかもしれない。とすれば、私たちの世紀の明日は、不作の長期予報を告げられたとも思える。そこに、伝統と現代の芸能（芸術）を大切に守っていこうとする、形式温存の気持ちがどの時代にもまして高まる。

問題はこうだ。形式尊重、伝統の擁護を真剣に考えるのは、その形式としての芸能（芸術）にかかわり深い少数派であって、人びとの多数は推移がどうなろうと大きな関心事ではない。人気とは人の気であって、自分の気ではいかんともしがたい。

## 練習問題2

## \*カッコの処理

… ところが、原子炉でウランを燃やすとウラン238の一部は、炉内の中性子を獲得してプルトニウム239（厳密にはウラン239、ネプツニウム239を経由）に変わる。

このようにして原子力発電のいわば副産物的にできるプルトニウムを、その核分裂性という性質を利用して核燃料として再利用することができれば（これを「核燃料リサイクル」とも呼ぶ）、ウラン資源の利用効率が増し、原子力に新しい可能性が開けるかもしれない。これがプルトニウム利用計画のねらいであり、プルトニウムの強い毒性、核兵器材料としての利用可能性という二つの大きな問題点を承知のうえで、なおこのプルトニウム利用を目指そうという人たちが出てくるゆえんである。

ところで、このプルトニウムの核兵器利用可能性だが、通常、アメリカやロシアの核弾頭に組みこまれているのは、核兵器級といって、プルトニウムのなかでも核分裂しやすいプルトニウム239の含有量が非常に高い。九三ないし九四%ぐらいである。

このようなプルトニウムは、特別な軍事用の生産炉を用いれば生産できる。あるいは、「もんじゅ」のような高速増殖炉の外周燃料（ブランケットと呼ぶ）では、もっと高純度（プルトニウム239が九八%以上）のプルトニウムができる。そんな特殊な原子炉を使わなくても、通常の原子力発電所で、短期間（たとえば一カ月）燃料を照射しても高純度プルトニウムができる。

もっとも、高純度プルトニウムでないと、核兵器ができないということではない。たしかに、日本では、原発からの「純度の低い」プルトニウムは核兵器にならない、あるいは核兵器物質としての実用性はない、と主張する「専門家」が多い。

日本で一般に用いられるプルトニウムは、原発の使用済み燃料を再処理（化学処理）してつくられるもので、表序-1に示すように、たしかにプルトニウム239の濃度は低い。同じく核分裂性のプルトニウム239の濃度は低い。同じく核分裂性のプルトニウム241を加えても、核分裂性成分は七〇%ぐらいだ。こういうプルトニウムを「原子炉級のプルトニウム」というが、「原子炉級のプルトニウムは実質的には核兵器にならない」から、「日本のプルトニウムは平和利用にしかならない」と称する、もっともらしい「専門的意見」がまかり通っている。

しかし、こんな言い分は、いまや世界のどこでも通用しない。アメリカの政府の公式見解といってもよい全米科学アカデミー（NAS）報告（一九九四年二月）では、「実質的に、いかなる組成のプルトニウムも核兵器製造のために利用できる」と述べている。

たしかに、原子炉級のプルトニウムには若干の問題がある。それはプルトニウム240が二〇～二五%含まれているからで、これは核分裂そのものには何の障害にもならないが、中性子を発生するので、ねずみ算的な核分裂連鎖反応（核爆発）の引き金を早く引きすぎしてしまう「早期誘発」（早燃え）の可能性がある。そのために、やや性能が落ちることもあると考えられている。

しかし前に述べたNAS報告では、原子炉級のプルトニウムを用いて長崎原爆と同種の簡単な装置を作れば、最低（早燃えが生じても）一〜数キロトンの核爆発を起こし、十分に核兵器としての威力をもつ、としている。

つい最近まで、なかなか詳しいことが公表されなかったが、じつはアメリカは、実際に原子炉級のプルトニウムを用いて核実験をおこなっており、きちんとした核爆発を起こさせるのに成功している。最近の発表によれば、その威力は「二〇キロトン以下」程度という。広島原爆（一五キロトン）以上ということかもしれない。

その道では定評のあるアメリカのRAND研究所の報告書（一九九三年一二月）によると、原子炉級のプルトニウムを使った場合の（核爆発を起こさせるために必要な）臨界質量は、適当な反射材（核分裂の連鎖反応を効率よくおこなわせるために、プルトニウムをとり囲むように配置する金属材。ベリリウムなどが用いられる）を用いるとき、六・六キログラムと推定され、核兵器級のその四割増し程度にしかならず、核兵器をつくるうえで、とくに問題はない。本書は、このような最近の知見のうえに立って、すべてのプルトニウムは核兵器に転用されうる危険性をもった物質である、という認識にもとづいて書かれている。

#### プルトニウムの毒性

プルトニウム239をはじめ、プルトニウムの同位体の多くはアルファ線を出す放射体だ。まずプルトニウム239を中心に考えると、その放出する高エネルギーのアルファ線は、通過する行程中に周辺の物質と強い相互作用を起こし、化学結合（とくに人体の場合は遺伝子）を損傷するような影響を与える。

アルファ線は大きく、他の物質との相互作用の強い粒子（ヘリウムの原子核）なので、貫通力は弱く（「飛程が小さい」という）、たとえば空気中では、数センチもあればとまってしまう。したがって、プルトニウム239などのアルファ線を出す物質が体外にある場合、一般にはそれによる被曝はあまり問題にならない。とくに何らかのコンテナに入っている場合には、外部に対する放射線の影響は、ほとんど問題にならない。

#### 二通りの読みがあつて意味が異なるもの（58）

隣	トナリ トナリ 門前に並んでいる木の意。	独楽	コマ 玩具 ドクダク ひとり楽しむこと。
売り 叩く	ウリウツ 下落相場において売り方がさらに相場を下落させる為にあい値段で盛んにうる。 ウチウツ 安い値段で全部うる。たたき売る。	上調子	ウツウツ 他の三味線より高い音域の旋律を奏して合奏に彩りを添える。 ウチウチ 言動が軽々しく落ち着きのないこと。

### 図表写真の終わり方について

図・表・写真などを説明した場合の終わり方が様々です。図・表・写真の終わり方は、入り方と統一して、「・・・図（表・写真）終わり」で終わって下さい。

例 〇〇ページ図、〇〇〇、「説明」・・・「図」終わり。

例 〇〇ページ表、〇〇〇、「説明」・・・「表」終わり。

例 〇〇ページ写真、〇〇〇、「説明」・・・「写真」終わり。

「・・・、説明終わり」とか「・・・写真（図・表）説明おわり」などいろいろ有りますので統一しましょう。

### 『言葉に関する問答集』より 文化庁編

問：「農作物」と「ノウサクブツ」か「ノウサクモツ」か

答：「農作物」は「ノウサクブツ」と読むのか、それとも「ノウサクモツ」と読むのかという問題である。

「農作物」とは、農耕によって得られる生産物である。すなわち、田畑に栽培することによって得られる穀類・野菜類・果実類のことである。

結論から先に言えば、「農作物」は「ノウサクブツ」と読むのが一般的であって、「ノウサクモツ」と読むのは、誤りであるとは言えないにしても普通には用いない。それならば、なぜ、「ノウサクブツ」か「ノウサクモツ」かの問題が起こってきたのかを考えてみると、「農作物」を意味する語に、別に「さくもつ」と言う語があり、これは「作物」と書く。（同じ表記の「作物」と書く「さくぶつ」と言う語もあるが、意味が異なる。）この「さくもつ」と言い「作物」と書く語に引かれて、「作物」に「農」を冠した同じ意味の語「農作物」を「ノウサクモツ」と読み誤ったところから生じた語であって、本来はノウサクブツと言うべきであろう。同じ語構成の「工作物」・「著作物」なども「～サクモツ」ではなく、「～サクブツ」である。

試みに辞典・参考資料などでの取扱いを見てみると次のとおりである。

『日葡辞書』（慶長8〈一六〇三〉）・『和英語林集成』（初版・慶応3〈一八六七〉）を含めて、

明治二十四年刊の『言海』から昭和六十三年末までに刊行された69種の主として国語辞典では、

○「のうさくぶつ」・「のうさくもつ」をともに見出し語に採録していないもの…18種  
（主として大正以前のもので、昭和初期のものは2種。）

○「のうさくぶつ」・「のうさくもつ」をともに採録しているもの……………4種  
（昭和初期のもの1種、戦後のもの3種。）

○「のうさくぶつ」だけを採録しているもの……………45種  
うち、語釈のあとに、「のうさくもつ」の形を掲げているもの……………21種  
「[のうさくもつ]は、あやまり」としているもの……………1種

○「のうさくもつ」だけを採録しているもの……………2種

次に、NHK関係の資料では、一貫して「のうさくぶつ」を採り、資料によっては、「のうさくもつ」を標準ではないとして放送では排除している。特に『NHK放送用語集—放送用語委員会決定事項—』

（昭和52）では、

農作物〔ノーサクブツ〕「作物」を〔サクモツ〕と発音する類推から〔ノーサクモツ〕と誤って発音することがあるが、「農作物」の標準となる発音は〔ノーサクブツ〕である。

と述べている。

**利用者から製作依頼を受けている原本**

- 『社会福祉の歴史』高島進著 <社会科学>
- 『フランス史 上』アンドレ・モロワ著 平岡昇訳<歴史>
- 『フランス史 下』アンドレ・モロワ著 平岡昇訳<歴史>
- 『部落起源論』石尾芳久著 <社会科学>
- 『ニュースキン「新たな夢」へ』上之二郎著 <油脂類>
- 『ネットワークビジネス』ドン・フェイラ著 形山淳一郎訳 <油脂類>
- 『魂の絆』トマス・ケリー著 中津悠訳 <小説>
- 『ノモンハンの夏』半藤一利著 <日本史>
- 『社会福祉の歴史』高島進 著 <社会福祉>
- 『三本の矢 上』榊東行著 <小説>
- 『三本の矢 下』榊東行著 <小説>
- 『民法（5）契約総論』第4版 遠藤浩他編 <法律>
- 『民法（6）契約各論』第4版 遠藤浩他編 <法律>
- 『おなら大全』ロミ&ジャン・フェクサス著 <民族学>
- 『魂の幼児教育』としくらえみ著 <教育> 100頁
- 『ディスカバリー世界の実相への接近』<宗教> B5判 308頁

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

**今回引き受けて頂いた  
原本とグループ**

<ul style="list-style-type: none"> <li>『田中角栄の遺言』小室直樹著 &lt;政治&gt;</li> <li>『真理の言葉「正心法」講義』大川隆法著 &lt;宗教&gt;</li> <li>『世界史B98年度用大学入試センター試験超対策問題集』</li> <li>『幼児のための人形劇』フイヤク著 高橋弘子訳</li> <li>『中坊公平の「人間力」』中坊公平・佐高信著</li> </ul>	<p>えくてもあ 〃 〃 高槻市音訳グループ ICCBリクエストグループ</p>
---	--